



女
武
闘
家

ガ
ン
ガ
ン
突
か
れ
ち
や
う

M

ElectricSheep



世界に平和を取り戻すため、勇者と共に冒険をしていた美しき
女武闘家マルティナ。
激しい戦いの末、世界樹で勇者の
剣を手に入れようと
したまさにその時魔王の
卑劣な罠にはまり、
パーティーは散り散りになってしまった。
意識を取り戻したマルティナは勇者が生きていることを祈り、今や
モンスターの支配する地獄と化してしまった世界を一人旅していた。
各地の村々で救いを求める人々を助けてまわっていた彼女は
グロツタの街を魔王軍の幹部が乗っ取り人々を苦しめている
という噂を聞きつけ単身乗り込んだのであった。



次々に襲い掛かってくるモンスターどもをその華麗な足技でなぎ倒していくマルティナ。

その光景は嵐のように激しいが、その切れ長の目と大きな瞳可憐な口元から放たれる音色は聞き惚れてしまう程で、鍛え上げられているもののその体は筋肉と脂肪の絶妙なバランスによりたくましさとしなやかさを両立させている。

蹴りが繰り出されるたびに重たげに揺れる豊満なバストとその反面折れそうなほどに細くくびれた腰、肉のたっぷりつまった双臀はプリっつとしており人間ではないモンスター達ですら思わずその妖艶さに見とれてしまう程だった。

それは鋭い技に加えてモンスターを戸惑わせ彼女の強さをより際立たせていた。

「お前達の親玉はどこっ？これ以上やられたくなかったら
さっさと私をそこへ案内しなさい！」

もう何十体もモンスターを倒しているというのに息一つ乱さず
余裕の表情で彼らを問い詰める彼女。

「ひいいっ！くそっ弱そうな女の癖にこんなに強いなんて・・・
軽くいたぶって犯して喰ってやるつもりだったのに！」

あてが外れ焦るモンスター達。

「だめだっ俺たちじゃ歯が立たねえ。これはもうイギー様に頼る
しかねえっ」

恐れおののいたモンスター達は逃げるように彼女を

イギーのもとへと誘い込む。

「はあっ！」 強烈な蹴りがモンスターの頭を穿つ。

美しさと強靭さを兼ね備えた肉体から放たれる技に凶悪な
モンスター達も恐れおののいている。



「お前がイギーねっ！ 私に倒されたく
なかつたらさっさと街の人達を解放しなさい！」

一目でボスとわかるその大きな角と巨体、
普通の人間ならその姿形だけでたじろぐ
だろう。その背中に向かって全く物怖じせず
迫るマルティナ。

「誰ダア？」

俺サマニ刃向カウ愚カナ

人間ワア……」まるでカエルが人語を介した
ような声でゆっくりとその巨体が振り返る。

「コノ俺サマヲ妖魔軍王ト知ツテノ狼藉カア！」



「カツ……」

マルティナを一目見た瞬間に凍りつくイギー



「なっ……」

「ななななんてきやわゆいんだあーっ
そのツヤツヤした黒髪、気の強そうな目
かわいい口元、たくましくしなやかな肉体
おっきなお胸、細い腰におっきくて
プリプリしたお尻！」

「僕ちん、君に惚れちゃいましたーっ
さっきまでの威厳を失い頬を赤らめて
マルティナのその美しい姿にー目惚れ

してしまっイギー



「ふ ふざけないで！」

「ぼぼぼ僕チンのお嫁さんになってください！」

「い、いい加減にしなさい！」

「私はお前を倒しに来たのよ！」

「ああっその怒った顔がまただまららないじょ〜」

「ホラっ
君を見て僕ちんこんなになっちや
ったよーっ！」 ボロンッ
「ひっ！」

興奮したイギーが股間から取り出したそれは
あまりにもおぞましかった。





人の足程の太さもあるうかと思われるその巨大な
イチモツは天に向かってそそり立ち
太い血管を浮き立たせカリ首には無数のイボ
のようなものが密生し動物の角を思わせる
亀頭の反り返りは凶悪さの象徴のようだ。
すでにビクビクと脈打ち熱くなっている。
それは湯気まで立ち昇らせている。
さらに数メートルも離れているというのに
鼻をつんざく強烈な

異臭がこちらまで匂って来ていた。

「い、イヤ……」

どんなモンスターにも一步も引いたことが
ないマルティナもその異様なモノを
前に思わず後ずさってしまふ。

「僕ちんのお嫁さんになってくれたら〜
これで毎日かわいがってあげちやうじよ〜」

「だ・・だれがお前なんかと・・

ふざけるのもいい加減にしなさい!

もう許さないわっ!」

何とか気合を入れ戦闘態勢に入る

マルティナ

「お、お、僕ちんと一対一で戦おうっていうの?」

その気のつおい所がまたかわいいにや〜」



一気に塔を駆け上るマルティナ
街の中心に位置する一際高い塔、以前に訪れた
ときはここで武道大会が開かれていた。
その会場だった所の広い円形の広場に出る。
ここは彼女が勇者と出会った思いでの場所でも
あった。



イギーの素早さも異常だったが、明らかに彼女の動きはさつきよりも精細さを欠いていた。

(中々捕らえられない・・・高速で移動している?)

いいえというより空間を転移しているの・・・)

何故かさつきから呼吸が乱れてしまう

いつもならこのぐらいの戦闘なら汗をかくことも

ないはずなのに今は汗が止まらない。

(それにしても何なのアレ・・・イギーに

見せつけられたあのおぞましいモノが

頭から離れない。以前にロウ様のを偶然見て

しまったことはあったけれどあんなに大きくて

太くなかった。モンスターのものとはいえ

アレが本当のオスのおち・・・なの?

だとしたらあんなモノが本当に

アソ・・・に入るといふの?

ぐりぐりと亀頭の先を子宮口に押し付けるように
イチモツを擦るイギー
もう一ミリも動かす余裕のない彼女の狭い秘肉が
ギチギチと悲鳴をあげて軋む。

「ひああああっ！うっ動かさないで……」
その未知の衝撃に悲鳴をあげるマルティナ。

「ぐっとうぐぐぐっ」蹴りを繰り返した片足立ちの姿勢のまま挿入されているので通常よりも膣内に重量がかかる。足ががくがくと震える。イチモツを抜こうにもイギーの力り高の亀頭がガチガチに彼女の膣肉の壁をロックしているので中々抜けない。しかも抜こうとして動く和不自然な体勢で入ったイチモツがさらに彼女のオ○ンコを抉り耐えがたい感覚が下腹部を襲う。

「おほっ〜そんなにグリグリしたら僕ちん感じちやうよ〜」
それでも渾身の気合で身体を捻り。

「いっのおツ！」

グボオツ！

つと何とか蹴りを繰り出しイギーがそれを避ける
とようやくその巨大なイチモツが彼女のアソコ
から抜ける。



内臓が飛び出してしまおうかと思う程の衝撃に
一瞬意識が飛びそうになる。大きく穴の
空いた膣内からスパッツ越しに
ビュルっと見たことのないネバついた液体が飛
び出した。「くふうっ……」

膝から崩れ落ちそうになりながらも
必死にこらえ何とか両の足で立つマルティナ。



「ホラホラ〜ぼくちんの華麗な舞について
これるかな〜ほれほれアレもだしちやうよく
「なっ?」

なんとイギーがふざけてまたイチモツを出して
今度は踊りだしてしまった。硬さと弾力さを
持ったそれがイギーが腰をふるたびにブラン
ブランと揺れる。

「なんて奴なの!こんなに戦っていて不愉快なの
は初めてだわッ!」

しかし言葉とは裏腹にぶらぶらと揺れるそれが
目に入るたびに何故か体が熱くなってしまう。



前にも似たような感覚を感じたことがあった。
それは初めて勇者様と出会ったときのこと
だったろうか……

幼いころに死んだと思っていた勇者様が生きてい
た。勇者様のその立派に成長した姿を見、
会話を交わしたときに感じた感覚。

その時よりも強くはつきりと感じる。

しかしそのような感覚をイギーのイチモツを
見て感じてしまったことが自分の純粋な

思い出を汚されてしまったようでとてもショック
だった。その心の動揺が彼女の動きをより
鈍らせていた。



その動揺を振り払うかのようになんとかイギーに
一撃を食らわさんと焦るマルティナ。

その渾身の人蹴りがまさにイギーを
捕らえたと思ったその刹那・・・



ドズツッ!

「いふうツ？」

一瞬何が起きたのかわからなかった。

下半身に大きな衝撃を感じ、奴の膝蹴りでも腹にもらったのかと思った。

しかし実際はもっと悪かった。



「ありやく僕のお○ンチンがマルティナちゃんの
お○ンコに入っちゃったよ
いきなりだなんてマルティナちゃんはせつがち
だにやく」
前戯もなしに

「なあっ? かつかはっ!」

あまりの光景に自分の目を疑うマルティナ
なんとイギーのイチモツがその根元まで
彼女の体内にすっぽりと収まってしまっ
いたのだ。



「そ、そんな…こんなことって…」
奇しくも彼女の疑問は早速解消されることになっ
てしまった。イギーの巨大なイチモツが
ずっぽりと彼女の膣内をこじ開けその先端は
恐らく子宮口にも達してしまっただろう。

「ぐっ苦しいい…」スパッツ越しとはいえ
当然初めてであるその純潔の秘口に
いきなり規格外のモノが一気に
最奥まで穿たれてしまったのだ。

「ひっあつっ……ああつっ……」

がくがくと下半身が震える。力が入らない。

膀胱が緩みビシヤツと尿道口から液体が迸る。

「あららっ……ぼくちんのオ○ンチンに入れられた

のがそんなにうれしかったのかにやっ」

「ち、違う……」息ができない。

限界を超えて押し広げられた膣口が軋む。

「ホラアッ僕のオ○ンチンの先っちよと

マルティナちゃんの一番奥のお口がキス

してるよっ」

「くっっ！」（ごいつ意外と素早い……）

マルティナが瞬足の蹴り技を次々と繰り出すも
その体格に似合わぬ素早さでクルクルと
まるでおどけているようにかわすイギー



「ふんっ！んんんっ……」

万力の力を込めてオ○ンコを締めるマルティナ。

ぐちぐちと肉壁がうごめく



ピチッ
ププッ



「ーっつく！ はあはあはあ」鍛え上げたその股間の筋力で
なんとかアソコの穴を元に戻す。

しかしスパッツ越しとは言えモンスターに自分の初めてを
奪われた屈辱と恥辱にわなわなと身体が震える。

「イギー……絶対に許さない！」





「よ・よくもやっつけてくれたわね……
い・今すぐぶちのめしてやるんだから！」

「おほおーッ！まだやる気なのかな〜
でも僕ちんもう君と戦うのは飽きてきたじよ〜」

「これ以上抵抗したら捕まえた人間どもが
どうなっても知らないじょ〜」

「なっ！」 見ると大勢の人々が今まさに

モンスタールに襲いかかられそうになっている。

「卑怯者！ 正々堂々と戦いなさいイギー！」

「ん〜大人しくしないでこいっつら全員潰しちやう
よ〜 そうされたくはなかつたら

大人しく僕の言うとおりにするんだじょ〜」

「くっ私に何をさせようって言うの！」

「ん〜じやあまずその服を脱いで僕ちゃんに

マルティナちゃんの生まれたまんまの

姿を見せてほしいな〜」

「くっ……」





ぽっかかりと空いた穴からぽたぽたとネバついた汁が垂れる。
イギーのち○ぽで子宮口がのぞけるくらいまで膣穴が
広がってしまった。

「はあ・・・はあ・・・アソコがスー・スーする」

オ○ンコの形に張り付いたスパッツ越しに子宮口の形まで
見て取れる。激しい戦いの内に既に処女膜は破瓜していたのか
出血はないようだった。

「足も閉じずに開いて立つんだじょ〜」
「ふうふう…」息があがる。

先ほどの一戦のせいか肌は赤く上気して火照り
乳首がインナー越しからもわかるくらい尖って
いる。「うひょいなんだ股間がビショビショ
じゃねえか〜びびっってお漏らししたのか
こいつ〜」
「ち、違うこれは…さつき入れられ…」

失禁と潤滑油の粘液で薄い
下着が濡れてうっすらと
下の毛が透けてしまっている。

「ああっマルチイナ様が
俺たちの為にあんな姿に〜」
目の前の陰惨な光景に町の人たちも
ことの成り行きを固唾を飲んで
見守っている。

「おいっ俺たちがどうなってもいいのか？」

「ここまで見せたんだからオ○ンコの一つや
一つ見せてもいいんじゃないか！」

「俺たちの命がかかってんだぞ！」

「なっ？」

緊張が限界に達したかあろうことか
町の人々がマルティナに強要しだす。

「だ・騙されないでみんな！」

こいつらは私たちが畏にはめて
貶めようとして・・・」

「うるせえーこっちは命が
かかってんだぞ！もったい
つけずにさっさと見せやがれ！」

「オーオーンゴ！」「オーオーンゴ！」

「ううっ……」異様な空気が広場に蔓延し

今や誰もがマルテイナにオオンゴを見せる

ことを強要していた。

思えばこのとき既にイギーの

術中にはまっていたのかも

しれない。

人々の心を巧みに操り

意のままにするのが

イギーがもつとも得意と

するところだったのだ。

それもこれもマルテイナ

の身も心も貶め支配する

のが目的だ。

「あああ……」

「ぐふふ〜いい恰好だじょ〜じやあその
下着も取っちやっうんだじょ〜」
やはり脱ぐしかないのか モンスターだけなら
まだしも町の人たちが見ている前で
全裸になるのは流石に恥ずかしい。

「そうしたんだじょ〜？」

人間どもがどうなってもいいの
かにや〜」 イギーが手をあげ
ると再び町の人達にモンスター
どもが襲い掛かろうとする。
マルティナが一言でも拒めば
たちまちここは地獄と化す
だろう。

「ひい〜や、やめてくれ〜」
「お願い殺さないで〜」

「やめて！」

言うとおりにするわ！

だから

町の人達には手だししないで！」

「そうそうわかったら素直に裸になるんだじょ〜」

「くっっ……どこまでも卑怯な奴め……」

何よりイギーの言いなりになるのが

我慢できないが人々の命には変えられない。

覚悟を決めてゆっくりと

下着をはぎ取って行く

マルティナ

「ああ〜武闘家様が

俺たちの為に酷い目に

合わされちまう〜」

下着も全て剥ぎ取り生まれたままの姿になって脇を上げ足を大きく開いて立つマルティナ。その美しさにモンスターも町の人々も一瞬息を飲んだように鎮まりかえる。

「おおお〜なんて美しいんだじょ〜やはり女子は何もつけていないのが一番美しいじょ〜」

陶器のような肌鍛え上げられてるにも拘わらずそれがより女らしさを際立たせてるよう作用している肢体。

大きく前に張り出したバストにその上に可憐に
咲いている桜色の乳首。つかめば折れそうな
程に細い腰にそこからつながる大きめの
お尻にかけての滑らかな曲線、
プリっと張った双臀は剥きたての
ゆで卵のように瑞々しい。

「うひょ〜これは
うまそうなニンゲンだぜえ」
「ああっ武闘家様なんて
美しいんだ」
「きれい・・・」男どころか
女までもその希に見る美しい
体に見とれている。

「おお・武闘家様結構毛深いんだな」

「くっ」 放浪生活のせいで下の毛まで処理が

追いつかず生え放題になってしまっていた

下腹の鬚りが白い陶器のような身体に

一層際立って見えてしまう。

羞恥に体が震えるがこ

こでうるたえてしまつては

奴らに付け入るスキを与えて

しまうだけだと必死に

平静を装うマルティナ。

「おほう〜これはこれは」脱ぎ捨てたマルチイナ
の下着を拾い上げて大きく広げるイギー
何日も変えていない下着にさっきのー線での
分泌液が染みてとんでもないことに
なっている。

「うわあ〜すごい汚れてる
ぜ〜ずつと履きっぱなし
だったのかな〜」

「やだ・・・」

「や やめる私の下着を
そんな風にするな！」

ある意味裸を見られるより
も汚れた下着を見られるほう
が恥ずかしい。

その下着をイギーは自分の鼻先までもっていき
あろうことかクンクンと匂いを嗅いだ。

「な・何をするの。そんなことやめなさい！」

「ぐひひいマルティナちゃんの濃いエッチな

匂いがするよお〜」

「いっついやあッ！」

流石のマルティナもありえ
ない変態じみた行為に
嫌悪感をあらわにする。

「おおっいいな〜こんな時じ
やなかつたら俺も嗅ぎたいぜ

〜」異様な事態ににわか

場の雰囲気怪しさを

漂わせてくる。

「も、もう十分でしょー!

言うとおりにしたん

だから町の人たちを解放しなさい!」

「んにゃ〜 何を言っているのかにゃ〜

まだまだこれからだじょ〜さあ

今度はお尻をこっちに向けてオ○ンコを

拡げて見せるんだじょ〜」

「な・何を? そんなことできる訳

ないじゃない!」

「んん〜? 人間どもが

どうなってもいいのかにゃ

〜?」再び町の人達に襲い

かかるうとするモンスター

ども。

「うわあああ〜やめろお〜」

「そうそう慌てないでゆっくり脱ぐんだじょ〜」
「まずは上着からだじょ〜」

「うう・・・こんなことをして何が面白いの・・・」
屈辱だが町の人たちを

危険な目に合わせる訳にはいかないと

言うとおりにするマルティナ

「あっと手は後ろに組んで

脇もしっかり見せるんだじょ〜」

気付くと周りには沢山のモンスター
ーと町の人々が集まっていた。

「なんだなんだストリップショー
の始まりかあ〜?」

「オイツ！もったいっつけずにさっさとオ○ンコ
開いて見せるよ！」

「そうださっさとしろ！こっちは命がかかって
るんだよ！」 はやし立てる声にイギーは
ただ黙ってニヤついている。

（人々の命には変えられない
・私が股間を晒してそれで
皆が助かるなら・・・）

そうしてマルティナは
尻に両手をあてゆっくりと
左右に割り開いていく。

ズゴンッ!

「のおっほおッ!」

イギーの巨大なチ○ポがとうとうマルティナの最奥まで到達する。

眉間に火花が散る。

まるで太い杭で身体を

貫かれたかのような

衝撃だ。

「スツすげえ〜全部は入っちゃまったぜ・・・」

「どんなオのンコしてんだあの女・・・」

「ぐへへ〜どうだいマルティナちゃん。僕チンの先っちょよとマルティナちゃんの子宮のお口がまたキスしちやっただよ〜」

「いっいやあああッ！」

自分でも信じられない

ぐらいに大きく広がった

オのンコにイギーのイチモ

ツが根元までずっぽりと

うまっていた。

それにさっきまでの痛みは今はほとんどなく
代わりにまるでイギーのチのポを歓迎するかの
ように媚肉がヒクヒクと蠢きチのポに吸いつく
ように動いている。

それが余計にマルティナを動揺させた。

「あっあああっ！
うっ嘘よ！こんなことって

「じやあ動かすよマルティナちゃん」

「僕のチ○ポでいっぱい気持ちよくなってるねえ」

「だっだめ！ 動かさないで！」

マルティナの両腕をしっかりロックして

ゆっくりとピストンを開始するイギー

今度もマルティナの媚肉を

なじませるようにチ○ポを

動かす。媚肉に湧き上がる

感覚は最早しっかりと

快感を現していた。

最初はゆっくりと徐々にペースを上げながら
「ああッいつイヤッ！そんなッあああッ！」
これがチ○ポを入れられる快感というものなのか
ありえない程大きなイチモツを無理やり
入れられ動かされているというのに
感じてしまっていることがとても信じられない。

受け入れがたい感覚に
いつそのこともつと
激しく乱暴にして欲しい
とさえ思った。

声を抑えようとしてもどうしても漏れてしまう

「ああっああっいつひいつあっあんっああっ！」

「なんだあの女感じてるのか・・・」

「あんなバケモノの犯されてよがってやがる

ぜあの女・・・」

だんだんとスピードを増す

ピストン。イギーの巨根が

出し入れされる度に媚肉が

めくり上がりオ○ンコの中身が

露出する。そしてまた一気に

最奥まで貫かれると陰核すら

巻き込んで密肉が圧縮され

子宮が歪む。

それ程ひどいありさまでも快感は一層強さを増し
媚肉はイギーのチ○ポに吸いつくように蠢く。

「ああっあんっ！だっだめっああっいいんっ

いいっ！」

「ぐへへへ〜どうマルティナちゃん気持ちいい？」

「き 気持ち、よく、なんか
ないッ」

「そんなこと言っても

声が出ちやつてるよ〜

オ○ンコもキュウキュウ

締め付けてきて

僕のチ○ポにすがりついて

るによ〜」

「なんだあの女、滅茶苦茶感じてるじゃねえか」

「ああ、俺たちの為とか言ってホントは

ただやりたかったただけなんじゃねえの」

「あっちっ違う・・・私は町の人達の為に

あんっ!・・・」

「そんなよがり声上げながら

言われても全然信じられ

ねえなあ」

「そ、そんなああっ違うの

信じてあんっいいっ!」

「ああっ僕ちん気持ちよくてそろそろ出ちやい
そうだじよ〜」

「えっあっそんな出るってまさか・・・」

「マルティナちゃんの中にたっぷり僕のお精子
を注いであげるからねえ〜」

「ひいいツイヤツダメ！

そ、それだけは許して！」

魔王が君臨し世界中で

女性たちが魔物に犯され

そして妊娠してしまった

ということを旅の道中

嫌と言う程耳にしていた。

モンスターの子を孕むなど死んでも嫌だった。
例えどれだけ犯されようともそれだけは
避けたかった。

「何を言ってるんだいハニー。マルティナちゃんは
僕ちんのお嫁さんになるんだからこれから
毎日交尾してどぴゅどぴゅ中だしするんだじょ」

「いっついやつ！そんなのダメ

よっなつ中だけは絶対いや！」

「ううううっそんなこと言っただって

もう出ちやうじょああっ

出る出るッ！」

ニチャツという粘液と媚肉の絡まる音と共に
マルティナのオ○ンコがぱっくりと口を開ける。
先ほどイギーに子宮まで貫かれたオ○ンコは
自身の予想に反してかなり奥の方まで露出
してしまった。

「あつ？い、いやツ
奥まで見えちゃう・・・」
あわてて閉じようとする
マルティナ。

「おいしい！閉じるんじやねえ
よ！もっとじっくり
見せろ！」

どぴゅうううううーッ！ビュクビュクビュク！
「ひいひいああああーッ！」
容赦なく最奥で放たれる大量の精液子宮を完全
に捕らえた発射は洪水のように子宮内に流れ
こんでくる。

「がああっお、お腹がああ

膨れる・・・」あっという間に

マルティナの子宮の許容量を

超えた精液が外へと漏れ出る。

ぶしゅううううッ

「うひいいつなんだあの量・・・」

「ありや確実に孕むな・・・」

「はあああつああつあががつ・・・」

快感と絶望がぐちやぐちやになり思考が飛ぶ。

しかしさらに今まで感じたことのない

感覚が子宮の辺りからじんじんと

湧き上がり。

「ああつな、何これ？何かくる
ああつ来ちやう・・・」

「ひっひっくっ！……くうううッー！」
アソコから子宮にかけて快感が巻き起こり
それが背骨通じて脳天までいっきに駆け上って
くる。

「いつあっはっはあああうっ！」
足ががくがくと震え。
立っていられないほどの快感が
止めどなく全身を襲う。

ズルンッ!

「あがつー!」

イギーのち○ぽが一気に引き抜かれる

今までかろうじて支えにしていたものが

なくなり自身の体重を支えることも

できず。膝ががくがくと震え倒れそうになる。

「ひえ〜イツってるぜあの女……」

「あんなのに犯されていつてやがるのか……」

とんだ変態女だぜ……」

「ひっひが……」

(嘘、私イツってるの?)

これが絶頂というものなの

……)

「あああつだつだめつ出ちやう・・・」
イギーに大きく穿たれ緩み切ったアソコから
大量の液体が流れ出る。
「ひいひいひいっやっオシッコ、オシッコ出ちやう・・・
と、止まらないよお〜」

「はあくあの女お漏らしし
やがるぜ」

「全くなんてはしたない女
なんだ・・・さつきまでごいつ
に助けてもらおうと思つてた
自分が情けないぜ・・・」

「ふう〜いつぱい出たじよう」

「ありやまマルティナちゃん僕ちんとの初めての
交尾がそんなにうれしかったのかにや〜」

「はあはあ・・・こ、交尾・・・これが・・・」

「ひっくっくはっ・・・」

はあはあはああ・・・

言い返す気力もなく

ただただ快感の余韻に

翻弄されるマルティナ。

卑猥な罵声を浴びるたびに何故か

ヒクヒクと媚肉が疼いてしい子宮がキュウキュウ
と締まる感覚があった。

（はああ．．．全部見られちゃってる。お尻の

穴もおしつこの穴もアソコも全部．．．）

アソコからは既に半透明の
密が溢れてきていた。

「さてさてもうマルティナ

ちゃんのアソコは

準備いいかにや〜」

そう言うといギーは巨大なイチモツを再び取り出しマルティナの尻に擦り付けた。

「ひっ？！いい、嫌ッ！」。肉食獣の角を思わせる

その巨根に悪寒が走る。

これがさつき自分の中に入ったとはとても信じられない。明らかに先ほどよりも大きく勃起していた。

「で、でけえ……」

「なんだアレ、あんなモノが入るのか……入れるんだよな……」

亀頭の先から出た先走り汁とマルティナの
密汁を絡めオマ○コにまぶしていく。

「マルティナちゃんのエッチ汁と僕チンの
汁をしっかりまぶしてと・・・」

「さあ僕チンのチ○ポでたっぷり可愛がって
あげるからねえ〜」

「やっやめて！そんなの
入らな・・・」



ミヂイツツ！ミリミリミリリ！

「はあああつがああつ！ああつ！ああつ！」

マルティナの懇願もむなしく容赦なくその
オ○ンゴに穿たれるイギーのち○ぽ。

「んおおおっマルティナちゃんの中狭くて
きつくてあつたかいによ〜」

「ひいいあつかはっ

やつやめてっいつ痛い！

さっ裂けるっ！」

ミチミチと限界を超えて

割り開かれる媚肉

その衝撃に悲鳴を

あげるマルティナ。

「ほら、まだ半分も入ってないじよ〜」

「ぐっぎぎぎぎっいいっ!」

「ひっひいでえ・・・」あまりの光景についさっき

まではやし立てていた人々も動揺している。

しかし流石と言ったところか

一気に最奥まで貫くことなく

半分ほど入れたところで

チ○ポを出し入れして

マルティナのマ○コに自分の

チ○ポを慣らしていくイギー

「ああっそ、 そんな！嘘よ！」

そしてさっきまで感じなかつた感覚がゆっくりと
伸び切った媚肉から滲みだしてきた。

その感覚に動揺するマルティナ。

（な、何っ？この感じ痛い

だけだったのに。私こんな

ものを入れられて感じ始めて
る？）そして快感が痛みを

わずかに上回った瞬間・

「はあはあ……くっこんな恰好……」

上体を下ろしお尻を衆人観衆にさらすマルチイナ
ぴっちりと閉じた縦筋や楚々とした窄まりまで
丸見えだ。

「おおっ丸見え！」

「武闘家様はきれいな
オ○ンコしてるなあ」

最早モンスターか人が

も判別のつかない卑猥な

言葉がマルチイナを

辱める。

「これでお前はイギー様のモノだ。人間！」

「ほーら跪いて俺たちに挨拶しろお！」

「よ、よろしくお願いします・・・」

「そうじゃないだろ！土下座してさっつき俺たちに
したことを詫びるんだよ！」

「くっ！・・・先ほどはあなた方にひどい仕打ちを
しても 申し訳ございませんでした・・・」

全裸のまま床で土下座させられ足蹴にされ
る。屈辱と恥辱で身体が打ち震える。



「俺のチ○ポにもちやんと謝ってくれよ」
「だ 大事なあなた様のち ち○ポを蹴って
しまい申し訳ございませんでした。」

「よし！じゃあこれをしゃぶって介抱して
見せろ！」

「なっ誰がお前のモノなど啜えるか！」

「あーんツだったらお前のオ○ンコにぶちこんで
もいいんだぜえ？」

「じやあ次は俺つちの番だな。

よいしょつと」

「ひいつ？ま まださせるつもりなの？」

「何言ってるんだよ。ここにいる奴ら今から全部

あんたが相手にするんだよ」

「そつそんな！

むつ無理よ！ここにいる全員

なんて！」

「ああっ？イギー様をお願いして全員でオ○ンコ
犯してやるか？」

「ひいっ！ やつやります。あなた様の

オ○ンポしやぶらせさせていただきます！」

数時間後・

「はっがあああっ・・・」身体中がネバついて
気持ち悪い顎がつかれ舌も痺れて呂律が回らない。

時間の感覚も失うほど次々とモノのスターどもの
チ○ポをしゃぶらされ途中から意識も
なかった。

「ふうく出た出た。うわっきつたねえなあ・・・
結局ほとんど吐いちまいやがったなあこの
ポンコツが」「ごっごめんなさ・・・
ぶぐつつうえええっ！」

「ヒイツ?」


ごめんなさい。あなた様の

オ○ンポ舐めさせてい いただきます。」

「最初から素直にそう言えばいいんだよお！」

汚いチ○ポを入れられるぐらいならしやぶった
方がましだと思った。けれどそれ以上に

モンスター○のち○ぽを入れられてさつきみみたいに
快感を感じてしまうのが何より怖かった。



「はぐんむうツ」頭をつかまれ乱暴に
いきり立ったチ○ポを啜えさせられる。
イギーよりはずっと小さいものの口に含むには
きつい大きさだ。

「歯を立てたらぶっ殺すからな！」

「はぐう・・・」

口に含んだもののフェラチオなどしたこと
もなく不器用に口をもごもごさせるしかない。

「なんだあしやぶることもろくにできねえのか
蹴ることしか脳のねえメスブタがよお！」

「口で吸いながら舌で裏筋を舐めるんだよお！」

「ふんっんぐっぶじゆるっぶぶうっ」
言われるがままに口で亀頭の先を吸い
裏筋で溝をなぞるように舐める。

「おういいぞ。初めてにしては上出来だ。

肉奴隷の素質ありだぜえ」

(くっ誰がお前たちの肉奴隷なんかになんか……)

「ああ・いいぞ。じゃ今度はもっと奥まで
啜えろ！」



そう言うのとモンスターは頭をつかんで一気に
マルティナの深くまで突き入れる。

「んぐっつ？ふぶっんぼおおおおっ！」

(く・苦しい……！)

いきなり喉奥まで達したチ○ポの異臭と苦しさを
吐き出しそうになる。

「オラアツ！吐き出すんじやねえよ！」

口をめいっぱい伸ばしてしやぶるんだよ！」

吐き出すまいと必死にチ○ポにしやぶりつく

マルティナ。美しい顔が間抜けな

ひよつと顔に歪む。

「ごっち見てしやぶれ！」

どうだ俺様の

チ○ポしやぶれて幸せだろう？」

「ぶぐっんぐうむぐうううっううっ！」

髪を振り乱し必死にモンスターのチ○ポを

しやぶるマルティナ。

せめてもの抵抗とモンスターを睨みつけてやる。

「ああ〜いいぜー！その顔！」

□マ○コ○のし甲斐が

あるってもんだ！」

「そろそろ出すぜくそ女！しっかかり□で

受け止めろよ！」

「うおおっ出る！」

「ぼっ？ぶぐううううっ！」

大量の精液がマルティナの口内に流れ込んでくる。必死で嚥下しようとして試みるも耐え難い匂いとありえないほどの濃さで喉にひっかかり飲み切れない。

「ぶっごぼおおっ！」

途端精液が逆流して口の中から溢れだす。

「うわっなんだこいつ吐き出しやがった！
だらしねえなあ・・・」

「がっごっごっほっおええええっ！」

一旦逆流した精液は止まらず胃に収まったものも
全て吐き出してしまおう。

「がうっぐみゅっぶへえええええっ！」



「あーあ。全部戻しちまいやがった・・・
たくフェラひとつまともにもできねえのかよ・・・」
「も・ごっつ・申し訳ございませうえっ・・・」

鼻からも逆流した精液の異臭が鼻腔を刺激し
頭がくらくらする。もう2度と取れないかと
思うほどの強烈な匂いが脳髓まで染みてくる
ようだ。





「さつきはよくも俺様の大事なところを蹴ってくれたなあ……」

「うつくっ」モンスターの一体が自分のチ○ポを私の顔面に擦り付ける。きつと生まれてから一度も風呂などには入ったことがないであろう異臭に頭がクラクラする。

ドズンッ!

「おっふっ!」ぶるんと重たげなバストが揺れ
一気に最奥までイギーのチ○ポが貫かれる。

その衝撃で軽く達してしま
うマルティナ。



「ありやま僕ちんの愛が強すぎてマルティナちゃん
の中身が飛び出してしまったじよ
なんておいしそうな子宮今すぐかぶりつきたい
くらいだじよ」

と言つてマルティナの子宮を鷲掴みにする
イギー「によほおおおっほおっ！」

ぶちゅううううつと子宮にたっぷり出された
精液が子宮口から噴出する。



「でもこれから毎日使うんだからちやんと

ナイナイしとかなないとねえ」 そう言うのとイギーは
飛び出したマルティナの子宮を指で押し戻す。

「ひぎいっ？はっががああああっ！」

内臓をいじくられる感覚に

脳が掻き回されるような衝撃が

体を突き抜け悶絶する。そのまま

床に崩れ落ちるマルティナ。

「おうおうマルティナちゃんのマ○コが
ぴくぴくしてるよもしかして入れただけで
イチヤった？」

「ちっ違うー！イってなんか・・・」

「ぐひひいうれしいじょーマルティナちゃん
どんどんエッチな体になっていつてるんだじょー」

笑いながら激しいピストンを
開始するイギー

「ああんっああっ

ひっつ 強い！そんなに

激しくしないで！」

今まで一部始終を見ていた町の人たちも
すっかりあきれ返ってしまった。

「なんだあの女。・。またやってるぜ。・。」

「あんなによがりやがってよ。・。あれで本当に
勇者ご。一考だったのかよ」

「今までだってああやって自分の体を差し出して
凌いできたんじやねえの？」

「いやっ違う！」

私は。・。この世界の
人々の為に。・。」

「薄情な人間どものことなんて気にしないで
もつと僕のオ○ンチンで気持ちよくなつて
マルティナちゃん！」 そう言うといギーがより
激しく突き上げるようにイチモツを叩きつけて
くる。
「ふああっ！ふっ深い！そっそんなにしたら
まっまたいつちやう！」

必死に抵抗しようとするも
いギーの一突きごとに思考
が吹き飛び快感のうねりに
飲み込まれてしまう。

「ううっ出っ出る！」

マルティナちゃんの中に
まだ出るよおおっ！」

どびゅうううううっびゅぐびゅぐっ!

「ひあああああっ! ああっ!」

再び子宮に大量に注ぎ込まれる精液。

「いっいっぱい出てるううあああっ

イっイっちやううっツ!」イギーに出されたと

当時に自身もアクメに達する。さっきのモヤモヤ

としたものではなくはつきりとわかる感覚で

身体中が射精される悦びに打ち震えている。

「おおうつまたオ○ンコが

ギユウギユウ締め付けて来て

マルティナちゃんもイっただ

ね。「あああ……ああっ」

「ふうふう」

イギーのち○ぽが引き抜かれるとたっぷりと
中出しされたオ○ンコがぽっかりと口を開ける。
びしやああああ。精子と粘液とオシッコが
ぐちやぐちやになって溢れ出る。

「はあっはあはあっいやああオ○ンコ
閉じなくなっちやう・・・」

激しいピストンでオ○ンコが
痙攣しているさっきのように
必死で股間に力を入れて
元に戻そうとする。

「なっなんだありや?」

「し 子宮だ! 精液がたっぷりつまった子宮が

オ○ンコから飛び出しやがった!」

「ひやははっすげえなああの女。 子宮まで

さらしてよがってるぜ。」

「ああ。 あそこまでいったら

もう芸の域だな! 武闘家

なんかより娼婦のほうが

よっほど向いてるぜ!」

「おっおがあああつ!」

「さあマルティナちゃんのおしやぶりが上達
したところでまた僕チンの相手をしてもらおうじよ
〜」もう立ち上がる気力もないマルティナの
体を無理やり起こし今度は後ろ取りで
挿入しようするイギー。

「いっいやっ!
だっだめ!
いっ今入れられたら
!...」

罵声を浴びるほどに何故か

敏感に体のほうは反応してしまおう。

「うううっはふううううううっ……」

びしやあああああッ

緩みきつたアソコから

黄色い液体が迸る。

「くっもういい加減にしてくれ。

とても見ていられない……」

「早くこのアバズレをどこかにやってくれ

不愉快だ……」

「わ 私は武闘家マルティナ

勇者様とともに世界を……」



ドサッ

「はあっはっふあああああっ」

どこにそんなに入っていたのかというほどにとめどなく精液がオ○ンコから流れだしてくる。

「ううっなんて見苦しい・・・」

「くっヒドイ匂いだ・・・」

「こんな奴に助けてもらおうとしてた

のがホントにバカらしいぜ。」

「あううう・・・」



ズパンツズパンツズパンツズパンツ!

「ああんツアーンツあんツあんツ!」

ずぐっずぐっずぐっずぐっ!

「ああおっおおうッおお奥っ奥すごっつい!

奥う〜」

ブジュツブジュツブジュツブジュツ!

「ああいっいいいっいいいイク!またイク!

イクうううううう〜ッ!」

「ふぐっむぐっじゅるっじゅるっ……」

「ぐふふ そんなにおいしそうに頬張って

そんなに僕のオ○ンチン大しゅきななの？

マルティナちゃん」

「だ 誰が貴様のオ○ンチンなど好きなもん

か！ むぐむじゅじゅんまんまつ

お○んぽ！お○んぽ！」

「もう〜素直じゃにやいんだから〜

そんな君にはまたズボズボタイムだよ〜」

「ひっ？ま 待って！さっきやったばかり

だからまだ……」



バチユンツバチユンツバチユンツ!

「ひいあああつああつああつあひいいー!」
どずつどぼっずぼぼっぶちゅっ!

「ひぎっあっがっおっおぐっおくううっ

あたっ当たるツ!そこそこそこおおおッ!」

バチユっバジユツバチユンツ!

「おおおおうツイツイグツマラいぐツ

イグうううツーーツ!」



「ああ〜出るっマルティナちゃんのお口に
出るよ〜」 ドビユル〜ツビユグツビユグッ！
「ぶいっ！〜ぶっぶううっむふうふうぶいっ！〜」

「むぐっむっこれは・・・中々・・・ムツチャツ
モツチャツ・・・濃厚な・・・お精子・・・
ぷちゅっぷちゅっぷちゅっ・・・がぷちぷちしていて
・・・」

「ああ〜マルティナちゃん僕のお精子そんなに
味わってかみかみしちやうのねえ〜どう

僕ちんの濃厚ミルクのお味は？」

「もぎゅっもぎゅ・・・ふむ・・・これは・・・もぎゅ

中々に濃くて喉にひっかかって・・・うまいぞ・・・

ぐっぐきゅりッぐきゅっぐきゅっ・・・」

「んっぐふっ！んんんっー！」
ぶるっぶるるっ！

「あっマルティナちゃん今イっただの？
お精子飲んだだけでイっちやっただの？」

「〜っくツ！ふうう〜っふうんふふふ」

「お精子飲んだだけでイっちやうなんてマルティ
ナちゃんほントにスケベで淫乱だにや〜
ほら僕にお精子ちゃんと飲めたか見せて
ちようだい」

「ぷはあああああゝゝつ」

「ひょうだ？へんぶ飲んだぞツ！んげつぶツ！」

「んひよおゝしゅごいしゅごい初めは

あんなに戻してたのに全部飲めるように

なつてえらいねゝ」

「ふんっ！私にかかればこれくらい朝飯前だ！」

「んじやあまだまだ朝まで時間があるから

じっくり可愛がつてあげようねゝ」「ふえっ？」

「ふんむツぐむつぐちゆるちゆぶツ」

「うほおう〜 おおツいいこのオツパイで

ずりずりするのしゅごいよくマルティナちゃん！」

「んむちゆしようだろう？こ これがパイズリ

というものだ・・・」

「うんしゅごい気持ちいいよこれ〜」

「ふんむっほらっほらっ私のパイズリで

さっさとイってしまえ！私の口の中で

射精してしまえ！」

ぷしやあああああッ!

ビグーシツビクビクビクッ!

「はあああッイってる! オ○ンヨイツちやつ
てるううう!」

ズジュグツじゅぐつブチュチュッ!

「はぐっ! いっいぎッがッああっいっ

イってる! まだイってるのにいっいきながら

突かれるのしゅごいッこれしゅごいよおおお

っッ!

パアンツパアンツパアンツ!

「ひいぎっあっあがっあうっあうっあうっ

ああああうううううッ!」

ブジュゴツずごっつずごっツずごんツずごっッ

「ああッああいっいいいっ気持ちいいッ!

オ○ンコー!オ○ンコギもぢいいいよおおおー

ッ!

「ああっイグッ!イグッマルテイナまた

イっちやうううう〜!」

「ふんごっごっぼっぶももっ・・・」

「ああ脳が・・・あたじの脳がおがされでりゆう
く・・・ああ・・・だめッだめえええく

そんなとこいじらないでく脳みそ掻き回さないで
えええ・・・ああ戻れなくなる・・・
戻れなくなっちやうのおおくく」
ぐるんっビグウツビクビクビクッ!



ズドンッ！
ぼっぷんっ！

ぶじやッ！



ドチユンツッ！ドチユンツッ！ドチユンツッ！

「あうっ！あうううっあああっひやあああう・・・」
パンパンパンパンパンツッ！

「ああツイグツまらイグツ！イクの止まらない！

オおおうっおおぐツ！ オ○ンコ擦り切れちゃう

オオ○ンコ壊れるツ壊れるううーっ！」





キュッ!

「んひやあっ?」

ドビヤガッ!

「ぶひやああああッ!」



「ふう〜マルティナちゃんのオ○ンコ気持ち
よくてこんなに出しちやつたじよ〜」

ほうらマルティナちゃんの可愛い子宮から
僕のお精子がこんなに溢れだして・・・」

「はああっはあッお お精子いっぱあい・・・」

「子宮口もこんなに開いてぱくぱくしてるよ」

グチツグチチツツ」

「ひゃああっがっ あひゃあああっ!」

ぷしやああああああッ!

ぴくーんぴくぴくぴくッ

「にょほおおおおっ

ほおうっほっほひいッ」

「マルティナちゃん僕ちんとのセックス気持ちよかった」

「ほっほっへもきもひよかつはれすう」

「そうこれから毎日いっっぱいしようね」

「はひいっ」

「はあ はあ はあはあ……」
シコシコシコシコ

「出すよマルティナちゃん顔に出すよ！
受け止めて！」

「んぱああああッ！」



「ハッ！」

鋭い蹴りが空を舞う

今日も私は世界の平和を取り戻すために戦い
続ける。

モンスターどもを一掃し町の人々を救う
のだ。
だがしかし……





ギョインツ
それは人間どもを畏にはめ
誘い込む仮の姿。



「ひやはあッさあ 人間どももよ私の奴隷に
なりなさい!」 イギー様のおかげで新たに
モンスターに生まれ変わった私は妖魔軍の
兵士生産肉奴隷として日夜戦いと中出し交尾
に励んでいる。

今も私の腹の中には数十の多様なモンスターの
幼体がやどり。子宮を突き破らんとする勢いで
生れ出るのを待っている。

身も心もイギー様に捧げた私にとってこれほど
うれしいことはない。そしていつか世界を
本当の闇に包み込むのだ。

「ふんっついにここまで来たのね」どうやら
しぶとく生きていた勇者がこの町にたどりついた
ようだ。

勇者を倒せばイギー様もきつとお喜びになる

本当の肉の悦び本当の生の目的を得た私を
見てきつと勇者も驚くことだろう。

そして勇者も罫にはめ私の奴隷としてやるのだ。

「ソフ 楽しみだわ・・・」

舌を突き出し大きくなりすぎた乳房とボテ腹を
揺らしながらほくそ笑むマルティナだった。

おわり







































































































































